

# カンボジア銀行業の効率性の決定要因

## ——2段階 DEA による効率性の計測——

一橋大学 奥田 英信  
一橋大学大学院生 相場 大樹

本稿では、カンボジア国立銀行（National Bank of Cambodia）が公表している 2006 年から 2011 年までの主要商業銀行 32 行に関する 140 サンプルを利用して、銀行経営効率性の決定要因を Bootstrap resampling を利用した DEA の回帰分析によって推計した。回帰分析の手法について、従来の研究のなかで問題となっていた DEA によるスコアに特有のスコア間の複雑な相関について、途上国金融分析でしばしば問題となるサンプル数の制約に対応するため、Simar, L., & Wilson, P. W. (2007). Estimation and inference in two-stage, semi-parametric models of production processes. *Journal of Econometrics*. を修正して利用した。

本稿は第 2 節で、現在のカンボジア銀行制度の背景を簡単に説明した上で、主要銀行について経営指標の比較を行う。第 3 節では DEA による銀行効率性の計測方法と効率性決定要因の回帰分析手法について説明する。第 4 節では、計測結果に基づき、経営形態・所有属性・経営規模の違いに着目し、それぞれの銀行の経営特性を検討する。第 5 節では、本稿で明らかになったカンボジアの銀行経営の特徴を要約する。

本稿の分析結果によれば、(1)カンボジアでは、サイズが大きい銀行は効率性が安定して高いこと、(2)外国資本が 50%以上の銀行は収益面で国内銀行に比べて効率性が劣ること、(3)海外で銀行業を行っている銀行の支店は収益面、(4)金融仲介面の両方で効率性が国内銀行よりも高いこと、(5)信用リスクの増加は収益面での効率性を下げること、(6)2010 年以後のマクロ要因は銀行の収益面での効率性を大きく下げていること、が明らかになった。これらの観察結果は、今後の銀行改革に対して、銀行の経営規模の拡大、外国銀行の役割の拡大、信用リスク改善のための銀行経営の健全性強化、マクロ経済安定化政策の重要性など、多くの示唆を与えるものとなっている。

本稿の分析にはいくつかの限界があり、将来の課題として残されている。第 1 に、本稿の回帰分析ではパネルデータを利用しているが、銀行固有の個体効果は無視されている。DEA を利用した回帰分析では個体効果を取り入れた手法は一般的ではないが、今後はデータのパネル構造を考慮した分析方法の開発が求められる。第 2 に、本稿の推計では、外資系銀行に分類される銀行の中に、親会社が銀行とは無関係で銀行としての経験的、技術的に専門性を持っていないものも含まれており、このことが外国所有による経営効率性の改善効果を過少に推計させている恐れが強い。今後の課題として、外資系銀行のより詳細な所有者の特定が必要である。